

唐話資料の二面性——内の唐話と外の唐話——

奥村佳代子

提 要

唐話原来只是日本长崎唐通事的语言。后来，唐通事冈岛冠山编写了《唐話纂要》，向一般日本人介绍唐話。事实上，原来的唐話和一般日本人所接触、或所学习的唐話并不一样。因此，在研究唐話时，选择资料极为重要。

本文将唐話资料按其成立年代分为三种：早期唐話资料、中期唐話资料及后期唐話资料。仔细考察这些唐通事的资料，则可以发现唐話是随着时代而变化的。然而，无论哪个时代，早期唐話资料在江户知识阶层中被认为是学习唐話最有价值的资料。这是因为，早期唐話资料均为刊本，而不是抄本。研究和利用唐話资料时，除了其成立时代的认定以外，该资料是否刊行也是一个必须考虑的因素。

1 唐話資料とは

江戸時代の長崎には、唐人貿易を運営するために唐通事が設置された。唐通事の存在意義は、その出自を生かした中国語能力にあった。彼らの用いた「中国語」は唐話と称された。唐通事は、中国とのみ交易を持った江戸幕府にとって、なくてはならない存在だったと言える。

また、唐話の果たした役割に関して言えば、経済面ばかりでなく、文化面においても重要な役割を担ったと言える。江戸時代に確立された読み本という文学スタイルは、中国の白話小説からヒントを得た。『水滸伝』などの白話小説は初め、唐話の知識に頼って訳された。唐話は貿易による経済活動に限らず、文学活動においても存在意義があったと言える。

江戸時代の一般の日本人は、中国人と直接話す機会はほとんどなかった。が、白話小説の翻訳や翻案小説などを通じて、唐話と間接的に触れる機会があった。唐話は江戸時代の日本人にとっては、まったく懸け離れた異世界の産物ではなく、少し手を伸ばせば触れることが可能だったと言えるだろう。

唐通事が職業上の特殊技能として用いた「中国語」だけでなく、一般の日本人にとっても意外に身近な存在であった「中国語」をも含めた「中国語的な言葉」を広義の唐話と考えるならば、唐話資料と称されるものは、以下の3種類に分類することができるだろう。

A：唐通事による唐話資料

唐通事が、次期唐通事の養成を主たる目的として用いた資料である。内容にはそれぞれ違いがあるが、唐通事として必要な知識や心構えが唐話で書き記されているという共通点がある。出版目的ではなかったため、序、跋や出版年の記述はない。成立に至る経緯や成立年代が特に明記されていない点からも、ごく内的な性質の資料であることが見て取れよう。この資料に分類されるものには、『訳家必備』『唐通事心得』『唐話』『官話纂』『小孩子』『閨裏閨』『忠臣蔵演義』などがある。

B：日本人唐通事岡島冠山による唐話資料＝中間的な資料

元唐通事の岡島冠山による編著書である。『唐話纂要』『唐話便覧』『唐話使用』『唐話便覧』などがある。唐通事は本来は日本に帰化した中国人の職業だったが、後に補助的な唐通事として日本人唐通事も誕生し、内通事と呼ばれた。岡島冠山は、内通事としての経験を生かし、上記の書物を江戸および京都にて出版した。Aに挙げた唐通事による唐話資料と決定的に異なる点は、出版物であるという点である。岡島冠山の京坂進出は、唐話の唐通事の世界の外への普及に繋がった。後述するように、唐通事の世界の外にいる人々、つまり一般的な日本人にとっては、岡島冠山の名が冠せられた書物の中の言葉こそが、唐話だった。

C：唐通事以外の日本人によって記述された唐話資料

A、Bに挙げたように、編著者が現役の唐通事あるいは元唐通事、または、中国人唐通事あるいは日本人唐通事による資料の他に、日本人によって日本人のために著された書物がある。たとえば、『仮名手本忠臣蔵』の漢訳である『海外奇談』がある。『海外奇談』は唐通事が訳した『忠臣蔵演義』をもとに、『小説字彙』の語句で装飾することによって、江戸時代の日本人の求めた「白話小説」像を体現したと言えるだろう。¹⁾

以上に挙げた3種類の唐話資料は、唐話を広義の意味で捉えた場合である。言い換えれば、江戸時代に唐通事またはそれ以外の日本人によって使用あるいは学習された中国語を分け隔てなく唐話と総称した場合には、唐話資料と言い得るものが、上記の3種類ある。

2 唐通事の唐話を反映する資料

前節では広義の唐話の資料を挙げ、3種類に分類した。では、次に狭義の唐話の資料について見てゆきたい。狭義の唐話とは、唐通事の唐話である。厳密には、唐話という呼称は、唐通事在使用し子孫に伝えた「中国語」を指す言葉としてのみ用いられるべきであろう。しかし、本論では先例に倣い、広義も狭義も含んだ総称として唐話という呼称を用いたい。区別する必要がある場合には、煩を厭わずに、広義の唐話、狭義の唐話、あるいは、唐通事以外の日本人の唐話、唐通事の唐話、などといった言い方を用いる。

さて、3種類の唐話資料のうち、唐通事の唐話を反映している資料は、A：唐通事による唐話資料とB：日本人唐通事（岡島冠山）による唐話資料（中間的な資料）である。Aは唐

通事が実用したと考えられるため、唐通事の唐話を反映した一次資料であると見なされる。Bは、編著者が唐通事出身とはいえ、日本人である。また、『唐話纂要』『唐話使用』『唐訳便覧』などの一連の書物を繙けば、Aとの違いは歴然としている。つまり、Bには語彙の多様性、あるいは非均質性が見られる。この点が、岡島冠山の資料（以下略して冠山資料と称す）を、唐通事の唐話資料として扱う際に注意すべき点である。当時の標準的な唐話を反映していると見なすことのできない語句も数多く含まれているからである。しかし、冠山資料は取り扱い注意の一面を有してはいるものの、やはり唐通事の唐話資料と見なすべきである。その根拠の第一は、貿易専門用語や唐人貿易の状況を具体的に表している語句が多く含まれているという点である。この点に関しては、すでに奥村 2000 などで例を挙げて詳しく論じたので、ここで繰り返すことは避けよう。本論の終わりに関連語句を挙げたので、参考にしていただきたい。（参考資料 a）

第二の根拠は、文法的な特徴が唐通事資料と一致しているということである。唐通事の唐話の文法に関しては、近世語との類似性が顕著であるように見えるが、今後さらに唐話文法として整理されねばならない。今の時点で特徴として挙げることの出来る点は、「因為」の用法である。現代標準語（普通話）だけでなく近世語も、「因為」は因果関係を表し、直後には原因や理由を表す語句が続く。ところが、唐話資料には上述の用法の他に、直後に結果を表す語句が続く用例が少なからずある。この「因為」の用法は、上述の 3 種類の資料のうち、唐通事が関係している資料には共通している。唐通事の唐話、すなわち本来の唐話では、「因為」は理由や原因を導くだけでなく、結果を導く語としても用いられていたのだろう。この用法が冠山資料にも見られるのである。同じく岡島冠山の編著だが、荻生徂徠らの手が加えられていると考えられる『唐音雅俗語類』にはまったく見られないことから、冠山資料に見られる「因為」の用法は、唐通事の唐話ならではの特徴であると言えよう。²⁾

第三の根拠は、上記の第一第二の根拠に拠るところが大きいのが、記述内容に関する点である。冠山資料の構成の特徴として、文字数による分類がある。たとえば、『唐話纂要』巻一は、「二字話」と「三字話」とから構成されている。二字話には「喫飯」「喫酒」「生意」などの語が、三字話には「買東西」「涼得狠」などの語が、項目に分けられることなく、羅列されている。項目も立てられておらず、解説も加えられていないため、具体的な場面を特定し難いという難点はある。が、逆に何の解説もないことが、第一、第二に挙げたふたつの根拠の有効性を補強していると言えよう。唐通事出身という岡島冠山の経歴、垣間見られる唐人貿易に関係する語句の存在からは、たとえ貿易に関する内容ではなくても、長崎での唐通事と中国貿易商人との間で交わされた会話内容であるのではないか、という推測が成り立つ。

以上の三つの根拠より、冠山資料は唐通事の唐話資料と見なされる。

ここで再度、唐通事の唐話資料とその担い手とを整理しよう。

資料の仮称	資料の性格	資料の担い手
唐通事資料	唐通事のために記述され、継承された唐話資料。	日本に帰化した中国人唐通事。世襲の唐通事。
冠山資料	唐通事の世界の外へ出た資料。唐通事以外の日本人の目に触れることとなった唐話資料。	岡島冠山。日本人唐通事。

* 「資料の仮称」とは、本論で特別に用いる呼称を意味している。

3 早期唐通事資料としての冠山資料と唐話の変遷

唐通事の唐話資料が反映している唐話は、時代によって変化が見られるのだろうか。この問いに答えることは、実はそれほど簡単なことではない。唐通事資料は、出版されなかった。基本的には写本である。公開し、保存するという意識がなかったからだろう。唐通事として必要な知識を習得するための教科書として、内々で用いられるものであった。だから、書物として成立した年代や著者などの記録がないのが普通である。これが時代を特定することを困難にしている。しかし、出版されなかったからこそ、必要に応じて書き換えられたり、現状に見合ったテキストが新たに作られた可能性がある。したがって、時代が明確になれば、唐話の変遷を知る上で、写本資料は非常に有益である。

現在、以下に挙げる資料が、特定とまではいかないが、ある程度まで時期を絞ることのできる資料である。反映している唐話が古い順に挙げ、時代決定の決め手となる根拠を示した。また、唐話を時代別にどのように区切るのが最も適切かは今後の課題だが、ここでは、1700年（元禄時代）ごろまでを早期、1700年ごろから1800年までを中期、1800年以降を後期と仮定する。

早期唐通事資料：冠山資料『唐話纂要』『唐訳便覧』『唐話使用』

『唐話纂要』は「唐話」と銘打って初めて出版された書物でもある。出版年は享保元年（1716）だが、前述のように、『唐話纂要』は長崎での唐通事時代に培った唐話を基礎としているため、唐通事を辞職する元禄14年（1701）以前の唐話を反映していると思なされる。

中期唐通事資料1：唐通事資料『唐通事心得』

『唐通事心得』はいくつかのエピソードから成り立っている。『唐通事心得』は写本で、書写年月が明記されていない。³⁾だが、1711年（正徳元）から7年間在位した、南京寺（興福寺）第五代住持旭如和尚が、次のような形で登場することが、ひとつの手がかりを与えていると言って良いだろう。

前遭南京寺裡的旭如和尚説一ヶ咲話。

この部分は、この記述が、旭如和尚の在位期間以降になされたものであることを示している。「前遭」という語は、『唐話纂要』にはないが、「下遭」には「又ノタビ」、「這遭」には

「コノタビ」という和訳を付けて収録している。したがって「前遭」は「前回、この前」という意味で用いられていると考えて良いだろう。また、引用部分から判断するかぎり、旭如和尚から直に話を聞いたような感じを受けるという点から、旭如和尚の在位期間からそう遠くない時点のものであろうことを伺わせる。よって、『唐通事心得』はおおよそ 1711 年頃から 1717、8 年頃の唐話であると位置づける。⁴⁾

中期唐通事資料 2：唐通事資料『訳家必備』

筆者が確認した『訳家必備』の写本を次に挙げる。

1. 長澤規矩也所蔵本（『唐話辞書類集』第二十集所収、汲古書院）
2. 静嘉堂文庫所蔵本
3. 筑波大学図書館所蔵本
4. 天理大学図書館所蔵本
5. 関西大学図書館内藤文庫所蔵本
6. 大庭脩氏所蔵本（『江戸時代の日中関係資料』近世日中交渉史料集五所収）

これらは全て写本であり、書写年月を記しているものと記していないものがある。日付のあるものは、静嘉堂文庫所蔵本と筑波大学図書館所蔵本とであり、どちらも末尾に「寛政七年八月」という記述がある。⁵⁾しかし、書写された年代は必ずしも、その唐話が用いられた年代に当たるとは限らない。寛政 7 年（1795）8 月という日付はしばらく措き、『訳家必備』の内容に手がかりを求めてみよう。

いずれの写本にも「南巡」という語が登場する。⁶⁾「南巡」とは、乾隆帝（1736 から 1795 年の在位）による江蘇、浙江への行幸のことである。『清史稿』によると、「十六年春正月庚子、以初次南巡」とあり、乾隆帝の南巡は乾隆 16 年（1751）に始まった。乾隆帝の南巡を詳細に記録した『南巡盛典』によると、1751 年から 1765 年の間に 4 度の南巡を行ったという。

『訳家必備』の記述（注 6 に挙げた引用部分を参照）によると、乾隆帝の南巡は「前年」に行われたのだという。「前年」には一昨年という意味と以前という意味とがある。『訳家必備』では、「前年」は、一昨年の意味で用いられている。⁷⁾したがって、『訳家必備』は乾隆帝の南巡からそう遠くない時期に書かれたという推測が成り立つだろう。上限を 1751 年、下限は 1767 年ごろの唐話資料であると位置づける。⁸⁾1700 年代後半に属するので、中後期資料と見なすことも可能である。『訳家必備』は、その書名が表すように、唐通事必携の「唐通事指南書」のような役割を果たす物であったのだろう。唐通事にとっては、有効かつ最新の情報が、その時代に実際に用いられていた唐話で記されているべきものであったと考えられる。

後期唐通事資料：『忠臣蔵演義』

『忠臣蔵演義』は早稲田大学図書館に所蔵されている。⁹⁾ 唐通事が次代の唐通事を養成するために記述したものではないので、『唐通事心得』や『訳家必備』のような唐通事のための教本としての側面はない。『忠臣蔵演義』は唐通事周文次右衛門によって訳された。浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の唐話訳であり、『海外奇談』の原本である。¹⁰⁾ 『海外奇談』は 1815 年(文化 12)が初版なので、『忠臣蔵演義』はそれ以前に訳されているはずである。杉村 1979 によると、周氏は 1766 年に父の跡を継いで唐通事となり、1826 年に亡くなるが、享年はわからない、という。1766 年の時点での年齢は定かではないが、唐通事として活躍し始めたこのころを上限とし、下限は 1815 年の唐話資料であると位置づける。

以上のように、出版されているという点で、他資料とは異質な存在である冠山資料を、早期唐通事資料として位置づけた。そうして、あらためて各資料を見直すと、以下の表に示したように、早期から中後期にかけての語彙の違いの一端が明らかとなる。

語彙	早期	中後期
个麼	×	頭目又說道，个麼福州話會説麼。(『唐通事心得』)
箇麼	×	箇麼，不勸了。(『訳家必備』)
給	×	給你回還。(『忠臣蔵演義』)
跟	×	既是陳三官跟老爹去，諒必無所不至。(『訳家必備』)
狠	×	這一宗屑線狠不好。(『訳家必備』)

表の×印で示したように、「それでは」という接続の言葉「个麼・箇麼」、介詞の「給」、名詞の直前で用いられその後に動詞の付く「跟」、副詞の「狠」は、早期唐通事資料には見られず、中後期唐通事資料では用いられるようになっている。

このように、冠山資料を早期唐通事資料として位置づけることによって、唐通事の唐話は時代によって変化したということが分かった。

4 唐通事資料と冠山資料との比較

前節で述べたように、出版された冠山資料と写本でのみ伝えられた唐通事資料とを、同等に扱うことによって、唐話の変遷を確認することができた。

冠山資料は、唐通事資料として十分に有効である。唐通事資料としての一面に焦点を当て、早期唐通事資料として位置づけたからこそ、唐話が固定された言語ではなく、時代とともに変化しうることを確認することができたのである。

いっぽうで、冠山資料と唐通事資料とは歴然とした違いが存在することも事実である。拙論(奥村 2000 など)で、すでに取り上げたが、冠山資料の唐話語彙の特徴として、多様性あるいは非均質性を挙げることができる。ここで再度その一部を紹介しよう。冠山資料と唐通事資料(『訳家必備』と『忠臣蔵演義』)との比較である。特に実用された『訳家必備』

との違いに注目したい。『忠臣蔵演義』は文学作品の翻訳であるという性質を考慮に入れる必要があるので、参考として挙げる。断りなく単に唐通事資料と言う場合は、『訳家必備』のみを指す。なお、各資料における個々の語彙の使用状況を、参考資料 b として巻末に付したので、あわせて参照していただきたい。

1. 代詞

唐通事資料の人称代詞は、単数形では「我」「你」「他」を用いている。一人称は「我」と決まっており、「吾」「俺」などはない。二人称は数カ所で「汝」を用いているが、「你」が圧倒的に多い。また、唐通事資料の複数形は、会話場面では「～們」のみを用いている。「～等」は文書でのみ用いられている。このように、人称代詞に関しては、唐通事資料では一定の代詞を用いているのに対して、冠山資料は、多様性に富んでいると言える。また、指示代詞も、唐通事資料では近称は「這～」、遠称は「那～」とほぼ決まっているが、冠山資料では「之・茲・焉・斯」なども用いられている。

2. 同動詞

一致を示す同動詞は、唐通事資料では「是」のみを用いている。冠山資料のように「乃」や「則」が用いられることはない。

3. 語気助詞

唐通事資料では、口語の語気助詞「了」「哩」「罷」「阿」「呢」「麼」が用いられ、文語の「焉」「耳」「乎」「矣」などはない。また、小説や戯曲によく見られる「則個」もない。冠山資料ではすべてが用いられている。

4. 唐通事資料では、比較は「比」に統一されている。「似」「與」は一切用いられていない。冠山資料では、「比」の使用は決して多いとは言えず、「似」「與」の用例が多い。

ここに挙げた両者の違いは、冠山資料の多様性と非均質性とを表しているとともに、唐通事資料の持つ実用性と均質性とを表していると言えよう。

同じ唐通事の唐話資料でありながら、冠山資料と唐通事資料とに見られるこのような相違点は、何故存在するのだろうか。この主因として、冠山資料が、外に向けて提示された出版物である、という点を指摘することができるだろう。

唐通事が唐通事のために記述したものであるならば、貿易業務や唐通事教育に直接関係のない内容を、わざわざ書き留めるという行動には出ないだろう。また、日常的にやりとりされる些細なことや冗談の類も、あまりにも取るに足らない事柄として、わざわざ記録されることはないだろう。しかし、唐通事の世界の外に属した一般の日本人にとってはどうだろうか。どんなに小さく、ごく日常的な事柄であっても、それが唐通事と中国商人とで構成される擬似中国の世界で繰り広げられた言動であるならば、知りたいという欲求があったのではないだろうか。

たとえば、冠山資料に見られる「則個」は、次のような文脈で用いられている。

你若沒事，必須過來，替我做半東，勸客人多喫兩盃酒則個。(『唐話纂要』)

(訳) もし用事がないのなら、きつとここへ来て、わたしの代わりに主人役を務めて、お客様がたにたくさんお酒を勧めてください。

このように、正式な仕事の場を離れた私的な場面では、冗談めかして、小説用語を文末に持ってくる、というくらいの「くれたた」口調は、現実的であると言えるだろう。しかし、唐通事資料では、唐人貿易の場面において必ずしも必要であるとは見なされない冗談口調は、一掃されることになる。

また、冠山資料は唐通事以外の一般の日本人知識人を、読者として想定していたのみならず、話し手としても想定していたに違いない。たとえば次のようなやりとりがある。

小弟這幾日得了些閑空，要在家讀書。仁兄家若有珍書，求借一看。決不敢毀壞。答；兄長乃看盡了百家之書，皆以為不珍。小弟家所藏也都是兄長看過的。只有一部，前日從崎陽送來，乃今清朝名儒詩集。明日就此奉上。(『唐話使用』)

(訳) 私は最近時間が出来たので、家で読書をしたいと思います。もし珍しい本がありましたら、ちょっとお貸しいただけませんか。けっして破いたりいたしません。〔答え〕あなたはもう百家の書を読み尽くしておいでなのですから、どれも珍しくないでしょう。私めが持っておりますのも、お読みになったことがあるものばかりです。一部だけ、先日長崎から届いた書物があります。今の清朝の名高い儒者の詩集です。明日お持ちいたしましょう。

このやりとりは、長崎を遠く離れた土地での、日本人知識人同士の会話であると見なすことができる。

このように、唐通事の唐話に基づきつつも、日本人知識人が話す可能性のある内容や言葉遣いを選んだ結果、文語の多用や、明らかに長崎を離れた土地でのやりとりが含まれることとなったのだろう。

唐通事資料とは異なる特質を持つ冠山資料は、日本人知識人に相応しい唐話資料であると見なされていたのではないだろうか。

5 内の唐話と外の唐話

さて、『唐話纂要』は、五卷五冊の初版が 1716 年に、冠山作白話文「和漢奇談」一卷を付した六卷六冊が 1718 年に出版された。¹¹⁾ また、1726 年には『唐訳便覧』(五卷五冊) が出版された。これらの岡島冠山による唐話の書物が、日本人読者にどのように受け入れられたのかを示す資料は、残念ながら未だ見つけだせていない。が、多くの日本人にとって、唐話を知ることの出来る書物として貴重だったことは明白である。このことを示す好材料として『和唐珍解』を取り上げよう。『国書総目録』によると、『和唐珍解』は 1785 年(天明 5) に出版された。唐来参和の作である。長崎丸山の遊女と、彼女に憧れて遠路はるばる来日し

た唐人、そして二人のあいだに立つ唐通事という三者が繰り広げる騒動を描いている。唐人が登場する作品にはすでに近松門左衛門の『国姓爺合戦』があり好評を博しており、さほど珍しいことではなかったろう。『和唐珍解』のアイデアは、登場人物である唐人のせりふを唐話にした点にある。しかも、その唐話は『唐話纂要』と『唐訳便覧』から引用された語句である。例えば、次の場面を見てみよう。ここに登場する唐人のせりふには『唐話纂要』から引用した語句（実線部）及び『唐訳便覧』から引用した語句（点線部）が見られる。

你們等一等。有何貴幹。休要賭錢。

這個頭巾甚麼價錢。賊則我也要買。價金三兩二分。價錢賤。

このように、『唐話纂要』の語句を非常にうまく利用して、遊女と唐人との会話を作り上げている。『唐話纂要』の語句にヒントを得て『和唐珍解』を著すことになったのか、遊女と唐人の交流を描くにあたり、『唐話纂要』を利用することにしたのか、成立過程の順番は定かではない。が、いずれにせよ 1716 年の出版から 70 年近い時を経てなお、『唐話纂要』の唐話は有効性が認められ、会話に用いられたのである。唐人との接触を持たぬ日本人のイメージにおいては、唐人とは『唐話纂要』に記されている唐話を話す人々に他ならなかったのであった。

しかし、フィクションの中ではなく、本物の唐通事と唐人は 1700 年後半の 19 世紀まぢかにおいて、どのような唐話でやりとりをしていたのだろうか。恐らく『唐話纂要』に収録された唐話だけではなく、収録されていない新しい語彙を使って会話されていたのではなかっただろうか。

前節で確認したように、ほぼ 1700 年後半の唐話を反映していると考えられる中後期唐通事資料の『訳家必備』では、『唐話纂要』を含む冠山資料には見出せない語句（个麼・箇麼・給・跟・狼）が使用されていた。明らかに、唐話は冠山資料の時代と『訳家必備』の時代とでは変化している。『和唐珍解』の登場人物である唐人の話す唐話は、古くさいとまではいえないまでも、同時代の唐話を反映してはいなかっただろう。それでもなお、唐通事以外の日本人は『唐話纂要』の唐話を、排除することなく受け入れていたのだった。

したがって、『唐話纂要』は早期の唐通事の唐話資料ではあるが、中後期に至るまで唐話資料として有効だったということになるだろう。また、『唐話纂要』とは別に、唐通事のあいだでは『唐通事心得』や『訳家必備』のように時代に応じた資料が作り出されていた。¹²⁾つまり、唐通事資料には、『唐話纂要』など冠山資料に代表される出版された「外の唐話」資料と、唐通事のあいだで内々に用いられ出版されることのなかった「内の唐話」資料とがあったと考えられるだろう。

5 まとめ

本論では、唐話資料には 3 種類あり、そのうち唐通事の唐話を反映する資料として有効な

2 種類(唐通事資料と冠山資料)を取り上げて、唐話は時代によって変化しえた、動きのある言葉であったことを紹介した。

また、唐話資料を、「外の唐話」資料と「内の唐話」資料とに分類した。「外の唐話」とはすなわち「固定された唐話」である。「内の唐話」とは「変化を許された唐話」である。

ある時代の唐話を正確に知ろうと思えば、「内の唐話」資料を繙く必要がある。しかし、「外の唐話」資料は固定された唐話であるがために時代遅れのものになっていたにもかかわらず、長いあいだ人々の支持を得ていたと考えられる。この背景には、当時の出版文化の持つ意味や、活字の持つ威力などが考えられるのではないだろうか。唐話資料を扱う場合には、「内の唐話」だけでなく、「外の唐話」が持ち得た影響力の大きさを考慮せねばならないだろう。

注

1. 『海外奇談』とその原本である『忠臣蔵演義』との関連は、拙稿 2002b で詳しく論じた。
2. 『唐音雅俗語類』の語句の大部分は、書物からの引用である。拙稿 2002a で詳しく論じた。
3. 『唐通事心得』のエピソードを含み、関係性の高い唐通事資料に『唐話』(県立長崎図書館蔵)がある。『唐話』も写本であり、末尾には「嘉永三年庚戌五月穀旦」という日付が記されている。両者の影響関係及び語句の異同は現在調査中である。
4. この部分だけで『唐通事心得』全体の時代を決めるのは単純に過ぎるのかもしれない。しかし、根拠とすることができる記述はこの部分だけである。
5. 静嘉堂文庫所蔵本と筑波大学図書館所蔵本最後に、「譯家必備全部予祇役于長崎使譯司抄寫之蔵一本於家塾 寛政七年八月 近藤守重」という記述がある。また、『唐話辞書類集』第二十集所収の『訳家必備』は、長澤氏の解題によると「江戸末期鈔本」であろうと推測されている。が、根拠は曖昧なので、正確な書写年代は不明である。しかし、この記述をそのまま鵜呑みし、どちらも寛政 7 年 8 月に書写されたと信じることはできない。日付だけでなく、奥付にあたる記述がまったく同じであるという点もまた、それが実際に書写した日付を表すものではないと考える根拠となり得るのではないだろうか。どちらかがどちらかを丸写したか、あるいはこれらはどちらも、別の本を丸写した可能性もあるだろう。
6. 『唐話辞書類集』第二十集に基づいて該当部分を以下に挙げる。

我再問你。掛在前面的神帳有皇恩欽賜四箇字。這什麼緣故。老爹原來不曉得。前年乾隆皇南巡的時節恩賜的疋頭。這有一箇緣故。往常聖駕出去的時節叫人家閉門閉戶迴避了。

不許拜駕。這一遭乾隆皇的南巡不是這樣。他的意思做皇帝的把百姓認做親生的孩兒。做孩兒的不認得爹娘，那裡使得。所以自家騎在馬上走，叫百姓都出來拜。

7. 『訳家必備』での用例を見てみよう。

叫出船主來，一見就是前年來過的船主。

晚生前年搭五番船回去，又要轉來。

ひとつめの例は、ある唐通事が中国船から出てきた船主を一目見て、「一昨年来たことのある船主である」と気づく場面であり、ふたつめの例は、くだんの船主が「一昨年の船で中国へ帰ったと思ったら、また舞い戻らなくてはならない」とこぼす場面である。

8. 他に具体的な年代を示す語として「新例以来」がある。「新例」とは、正徳長崎新例のことであり、正徳 5 年（1715）から本格的に実施された新しい貿易条例である。この条例によって、日本と中国の貿易は転換期を迎えることとなるので、唐人貿易の世界では歴史的な出来事として、直後に限らず、長い年月を経てからも、話題に上ったと考えて良いのではないだろうか。

9. 『忠臣蔵演義』と『海外奇談』については奥村 2002b で詳しく論じた。

10. 『忠臣蔵演義』は文学作品の翻訳でありながら、唐通事資料としての側面を備えている。この点に関しては、奥村 2002b で触れた。

11. 『国書総目録』によると、六巻六冊の再版が 1798 年に出版された。筑波大学図書館に所蔵されているが、筆者は未見なので、ここでは触れない。

12. 『唐話纂要』がまだまだ用いられていたといっぼうで、さらに時代が下ると、当代随一の文人であった大田南畝のように鋭敏なアンテナの持ち主は、江戸に居ながらにして『訳家必備』を手に入れていたようだ。「文化元年（1804）11 月 6 日 大田定吉宛」の書簡によると、「唐通事彭城仁左衛門、潁川仁十郎来見唐話の事など承候。東都にて得候訳家必備、莊獄唐話見せ候処、是通詞之初学に読候書のよし。段々訳文いたし候。」（『大田南畝全集』第十九巻）とある。

参考資料 a 冠山資料の貿易関連語句

ここでは明らかに貿易に関連していると見なすことのできる語句を挙げる。

1 『唐話纂要』に見られる貿易関連語句

京師商客 販貨為生 行家聚貨 明日清貨 公司貨物 三估一估 有些用錢 丟票生意
不許私商 公道生意 要寫領票 逐包明秤 細軟家伙 疋頭也多 大宗貨物 小宗藥材

2 『唐訳便覧』に見られる貿易関連語句

起貨未完，所以不許船中人上崖。

清貨完了，還要看貨。看貨完了，還要講價。講價完了，還要秤貨。秤貨完了，還要打點收買回頭貨哩。

趾銅板是本地的法式。

3 『唐話使用』に見られる貿易関連語句

明日與你講價。

参考資料 b 唐通事資料と冠山資料の使用語彙

1 代詞

1-1 人称代詞 (単数形)

必備： 我 你 爾 汝 他 *爾は人偏がつく。

演義： 我 你 汝 他 渠

纂要： 我 吾 吾子 俺 你 爾 汝 他 彼 *爾は人偏がつく。

便覧： 我 你 汝 他

便用： 我 僕 你 爾 他

1-2 人称代詞 (複数形)

必備： 我們 你我 你們 爾們 他們 *爾は人偏がつく。

演義： 我們 我等 我每 你們 你等 汝等 他們

纂要： 我們 你我 你們 你等 你每 爾等 他們 他每

便覧： 我們 我等 我每 你我 你們 你等 你每 汝等 他們 他每

便用： 我們 我等 我每 我黨 你我 你們 你等 你每 他們

1-3 指示代詞 (事物)

必備： 這 這箇 這些 這樣 那 那箇 那麼 是個

演義： 這 這箇 這些 這樣 這般 這等 這廝 那 那箇 那樣 那廝 此 是 斯
其 恁地

纂要： 這 這個 這些 這廝 那 那些 此 此般 此等 是 是個 之 焉 斯 其

便覧： 這 這個 這些 這樣 這般 那 那個 那些 那般 那廝 此 此等 是 之
斯 其 恁般 恁地

便用： 這 這個 這些 這樣 這般 那 那個 那些 那樣 此 此般 此等 之 茲
斯 其

1-4 指示代詞 (場所)

必備： 這裡 那裡 那里 彼

演義： 這裡 這裏 那裡 那里 那裏 此 此間 彼 彼此

纂要： 這裡 這廂 那裡 那首 那廂 個裡 此 此間 焉 彼

便覧： 這裡 這裏 這壁廂 那裡 個裡 此 此間 彼此

便用： 這裡 這裏 這首 那裡 那廂 那邊 此 此間 此處 彼此

2 動詞 (一致を示す動詞), 一致を示す語

必備： 是

演義： 是 係

纂要： 是 乃 者

便覧： 是 是乃 乃 則

便用： 是 乃 則 當

3 語気助詞

必備： 了 哩 罷 罷了 也罷了 呢 阿 呀 也罷 就是了

演義： 了 哩 罷 呢 呀 也 也好 矣 哉 乎 耳

纂要： 了 哩 罷 罷了 着 也 就是了 矣 哉 乎 耶 耳 而已 而已矣 則個

便覧： 了 哩 罷 罷了 着 也 也好 就是了 矣 哉 矣哉 焉 耳 則個

便用： 了 哩 罷 罷了 着 也 也好 也好了 哉 而已 則個

4 比較表現

必備： 比 不比 不如

演義： 比

纂要： 比 似 與 与 不如

便覧： 比 似 與 如 不如 不若 莫若

便用： 比 似 與 于 不如

参考文献

奥村佳代子 2000 「近世唐話学の多様性」, 『或問』第1号, 69-89 頁

—— 2001 「近世日本における中国語受容の一端」, 『中国語学』第248号, 290-306 頁

—— 2002a 「護園における中国語受容と俗語観」, 関西大学『中国文学会紀要』
第23号, 1-24 頁

—— 2002b 「『忠臣蔵演義』と『海外奇談』」, 『中国語研究』第44号, 64-80 頁

木津祐子 2000a 「唐通事の心得——ことばの伝承」, 『興善教授退官記念中国文学論集』
汲古書院。653-672 頁

—— 2000b 「『唐通事心得』訳注稿」, 『京都大学文学部研究所紀要』第39号, 1-50 頁

杉村英治 1979 「海外奇談——漢訳仮名手本忠臣蔵」, 『伝記』第3輯, 1-6 頁

竹田復 1939 「支那語漫筆 江戸時代に於ける唐話の流行」, 『文芸春秋』第17巻第4号

林陸郎 2000 『長崎唐通事——大通事林道栄とその周辺』吉川弘文館

『大田南畝全集』岩波書店 1989 年

『清史稿』北京中華書局 1976 年

大日本近世史料『唐通事會所日録三』東京大学出版会 1960 年

『南巡盛典』, 『四庫全書珍本』第十集所収。台湾商務印書館 1981 年



ソウル大学付属図書館前



研究会会場：韓国ソウル祥明大学校キャンパス